

アカデミックスタッフの自己評価

ここでは、各スタッフ個別の研究や教育、社会的活動等の業績を点検し、自己点検・自己評価をおこなう。点検項目は、①著作・論文等、②学会報告等、③講演等、④社会的活動等、⑤所属学会、⑥その他とし、スタッフ個人の活動評価、およびセンターでの活動評価を分けて考察をおこなうこととする。

なお、各個人の活動評価については、個人の活動評価とセンターでの活動評価とを分けて検討する構成になっている。センターの研究プロジェクトに直接関わらない各個人の研究活動を評価する理由としては、次のことを考えてのことである。すなわち、高等教育研究、とくにフィールドに根ざした教育実践の知を生み出すことを目指しているセンターの高等教育研究は、いまだ未開拓の学問分野であり、既存の学問知を活かしながらすすめられる、という類のものではない。しかしながら、それに関連する、たとえば教育学や教育哲学、教育工学、行政学、心理学、社会学、教育工学と様々な諸分野の知が、まさに学際的に結集してセンターの高等教育研究はすすめられているわけである。個人独自の研究活動如何は、センターの高等教育研究の水準を色濃く反映しており、各個人の研究活動からまず評価するのは、こうした理由からである。

- | | | |
|-------------------|------|------|
| 1. センター長 | | 荻野文丸 |
| 2. 大学教授法研究部門 | ・教授 | 田中毎実 |
| 3. 大学教授法研究部門 | ・助教授 | 石村雅雄 |
| 4. 大学教育評価システム研究部門 | ・助教授 | 大山泰宏 |
| 5. 大学教授法研究部門 | ・助手 | 溝上慎一 |
| 6. 大学教育評価システム研究部門 | ・助手 | 神藤貴昭 |

1. センター長 荻野文丸

1) 自己評価

【専門】伝熱工学・流体工学・拡散工学

【個人の活動評価】

化学プロセスを構成する種々の化学装置を設計、操作、および制御する場合、その装置内の流れの状態、温度変化等の熱的状态、および混合物を取り扱う場合は、各成分の組成変化等の混合状態を知ることが必要である。これらの状態変化を取り扱う基礎学問を輸送現象論という。筆者は、この輸送現象論に関する教育と研究を行っている。

教育面では、輸送現象論を基礎にして、いかにそれを実装置の解析または設計に応用するかという点に主眼を置いて学生を指導している。研究面では、エネルギー、環境および材料プロセスに関連する諸問題を重点的に取り上げている。

特に、最近の先端技術と呼ばれる分野においては、複雑な構造を持つ不均相系を取り扱うことが多い。現在のところ、そのような不均相系の輸送現象論は体系化されておらず、したがって、不均一混合物を処理する化学装置の形状、運転条件等は試行錯誤的に決定され、制御も装置内の現象はブラックボックスとして扱い、高度な数学的手法を用いて行っている場合が多い。しかし、今後さらに製品の品質について、多様かつ精密さが要求される度合いは大きくなるものと考えられ、それに対応するためには、不均相系の輸送現象論を基にした装置設計、スケールアップ、運転条件の決定、および制御システムの構築等が必要である。筆者はこの複雑な不均相系の挙動をより一般性の高い基礎的な問題に分解し、これを実験と数値シミュレーションの両面から解明する手法によって研究を進め、不均相系の輸送現象論を体系化することを目的としている。

【センターでの活動評価】

センター長として、対外的にはセンターを代表し、学内では研究所長会議、センター長会議に出席すると共に、教育課程委員会およびカリキュラム専門委員会の委員を務めている。センター内では、センター会議の議長を務めている。また、理系の1教員として、センターのスタッフとは異なった観点から高等教育システムについて何らかの寄与をしたと考えており、さらに京都大学の中で最大規模の工学研究科の1員として、センターの研究成果を工学研究科から全学へと広める役割をしたいと考えている。

2) 平成10～11年度現在までの業績 (1998.4～1999.7)

【著作・論文等】

Fumimaru Ogino, Atsuhiko Saito and Yasushi Saito; Simultaneous Measurements of Velocity and Temperature of the Natural Convection Flow on a Heated Rotating Disc, Proc. of 11th International Heat Transfer Conference, Vol.4, pp. 149-154, 1998.

Fumimaru Ogino, Takaji Inamuro and Atsushi Sudo; Dynamic Modelling of Czochralski Crystal Growth Process, Proc. of 11th International Heat Transfer Conference, Vol. 7, pp. 163-168, 1998.

Fumimaru Ogino and Masato Yamamura; Pressure Drop of Water between Injection and Production Wells Intersected by a Circular Fracture, Geothermics, Vol. 27, No.1, pp. 25-41, 1998.

荻野文丸・稲室隆二・鈴木徹・大西康博・首藤淳・宮原隆之; 固体粒子と流体の密度が等しい円管内固液混相流の流動と熱伝達、化学工学論文集、24巻、6号、pp. 958-965, 1998.

荻野文丸・稲室隆二・鈴木徹・鍵本奉広; 円板状固体粒子を含む円管内固液混相流の流動と熱伝達、化学工学論文集、25巻、1号、pp. 106-111, 1999.

荻野文丸・河合一穂・堂元拓哉・高橋徹; 液面に回転円板のある場合の回転円筒内液体の速度分布、化学工学論文集、25巻、1号、pp. 29-36, 1999.

Fumimaru Ogino, Masato Yamamura and Takeshi Yoshida; Heat Transfer from Hot Dry Rock to Water Flowing through a Fracture Surrounded by Secondary Crack Network, Geothermal Science and Technology, Vol.6, pp. 139-162, 1999.

Fumimaru Ogino, Masato Yamamura and Takeshi Fukuda; Heat Transfer from Hot Dry Rock to Water Flowing through a Circular Fracture, Geothermics, Vol. 28, pp. 21-44, 1999.

Takaji Inamuro, Masato Yoshino and Fumimaru Ogino, Lattice Boltzmann Simulation of Flows in a Three-Dimensional Porous Structure, International Journal for Numerical Methods in Fluids, Vol.29, pp. 737-748, 1999.

Takaji Inamuro, Masato Yoshino, Hiroshi Inoue and Fumimaru Ogino; Lattice Boltzmann Simulation of Flow and Mass Transfer in a Porous Structure, Proc. of FEDSM '99, 3rd ASME / JSME Joint Fluids Engineering Conference, 1999.

【学会報告等】

稲室隆二・吉野正人・荻野文丸; 格子ボルツマン法による多数の球からなる多孔質内の流動解析、化学工学会第63年会研究発表講演要旨集、p. 303 (1998年3月24日、関西大学)

荻野文丸・稲室隆二・東田泰斗; 液面で回転する円板をもつ円筒容器内の非定常流れの数値解析、化学工学会第63年会研究発表講演要旨集、p. 304 (1998年3月24日、関西大学)

稲室隆二・前場功之・荻野文丸; 平行平板間に円柱を含む固液二相流の流動解析、化学工学会第63年会研究発表講演要旨集、p. 305 (1998年3月24日、関西大学)

稲室隆二・東田泰斗・荻野文丸; 液面に静止円板をもつ回転円筒容器内における非定常熱流動現象、第35回日本伝熱シンポジウム講演論文集、pp. 79-80 (1998年5月27日、名古屋国際会議場)

荻野文丸・稲室隆二・小堂厚司; チョクラルスキー単結晶成長プロセスのモデリング、第35回日本伝熱シンポジウム講演論文集、pp. 103-104 (1998年5月27日、名古屋国際会議場)

稲室隆二・吉野正人・荻野文丸; 多孔質内における非定常流れの数値解析、化学工学会富山大会研究発表講演要旨集、C12 (1998年7月16日、富山県民会館)

Masato Yamamura, Fumimaru Ogino; Mass Transfer from Hot Fry Rock to Water Flowing through a Circular Fracture, Proc. of 4th International HDR FORUM, Session5b, 1998.

荻野文丸・稲室隆二・水田 敬；加熱回転円板上流れにおける不安定熱流動特性、化学工学会第31回秋季大会研究発表講演要旨集、S113（1998年9月29日、山形大学）

荻野文丸・稲室隆二・鈴木 徹・首藤 淳；円管内固液混相流中の粒子の分布と挙動、化学工学会第31回秋季大会研究発表講演要旨集、S117（1998年9月29日、山形大学）

稲室隆二・藤田一作・荻野文丸；加熱回転円板上の3次元熱流動解析、化学工学会第31回秋季大会研究発表講演要旨集、S319（1998年10月1日、山形大学）

稲室隆二・井上 洋・吉野正人・荻野文丸；格子ボルツマン法による2成分系の物質移動解析、化学工学会第31回秋季大会研究発表講演要旨集、S320（1998年10月1日、山形大学）

Takaji Inamuro, Masato Yoshino and Fumimaru Ogino; Numerical Analysis of Unsteady Flows in a Porous Structure by Lattice Boltzmann Method, Proc. of 4th KSME--JSME Fluids Eng. Conf., pp. 245-248, 1998.

稲室隆二・大西康博・荻野文丸；格子ボルツマン法による矩形ダクト内に球状粒子を含む固液二相流シミュレーション、化学工学会第64年会研究発表講演要旨集、N206（1999年3月26日、名古屋工業大学）

荻野文丸・稲室隆二・鈴木 徹・首藤 淳；固体粒子と流体の密度が等しい固液混相流中の粒子挙動と流体の速度変動、化学工学会第64年会研究発表講演要旨集、N208（1999年3月26日、名古屋工業大学）

荻野文丸・稲室隆二・鈴木 徹・首藤 淳・杉本剛一、流体と密度が等しい円板状粒子を含む固液混相流中の粒子の分布と挙動、化学工学会第64年会研究発表講演要旨集、N209（1999年3月26日、名古屋工業大学）

稲室隆二・井上洋・水野梨貴・荻野文丸；格子ボルツマン法による浮力場の熱流動シミュレーション、化学工学会第64年会研究発表講演要旨集、N304（1999年3月26日、名古屋工業大学）

荻野文丸・稲室隆二・水田 敬・廣島 満；加熱回転円板上流れにおける不安定熱流動現象、第36回日本伝熱シンポジウム講演論文集、pp. 67-68（1999年5月26日、KKR ホテル熊本）

稲室隆二・藤田一作・荻野文丸；加熱回転円板上の3次元熱流動解析、第36回日本伝熱シンポジウム講演論文集、pp. 69-70（1999年5月26日、KKR ホテル熊本）

稲室隆二・吉野正人・荻野文丸；格子ボルツマン法による多孔質内の物質移動解析、第36回日本伝熱シンポジウム講演論文集、pp. 217-218（1999年5月26日、KKR ホテル熊本）

【社会的活動等】

エネルギー・資源学会常任理事（1998年4月～）

日本伝熱学会関西支部長（1997年4月～1999年3月）

科学技術庁原子力安全技術顧問（1996年11月～1998年11月）

“Heat Transfer Asian Research” 編集委員長（1990年4月～）

（財）ゼネラル石油研究奨励財団理事（1988年5月～）

“International Journal of Heat and Mass Transfer” 編集委員（1987年1月～）

国際伝熱会議組織委員会日本代表委員（1986年8月～）

【所属学会】

化学工学会、日本伝熱学会、日本流体力学会、エネルギー・資源学会、日本混相流学会、日本地熱学会

2. 大学教授法研究部門・教授 田中每実

1) 自己評価

【専門】人間形成論、大学教育学

【個人の研究評価】

私の個人研究の中心テーマは、教育学の人間形成論への再構築である。つまり、私は、「子どもを導く術」という語

源によって視野を狭められてきた在来の「教育学」(pedagogy)を、ライフサイクルの全体と異世代間の相互形成を視野に納める「人間形成論」へと再構築する仕事を進めてきたのである。この作業の中間的な総括を著書にまとめる仕事も、ほぼ終了した(田中毎実『ライフサイクルと相互形成 ー人間形成論の構築』世織書房刊行予定)。

私の近年の業績は、人間形成論構築の中間総括から、中間総括以後の新たな展開に、比重を移してきた。たとえば、昨年書いた三つの論文は、それぞれに、人間形成論の新たな展開を示している。まず、「生涯教育から見る発達(日本心理学会公開シンポジウム発表原稿)」では「ライフサイクル論」を、そして「教育関係の歴史的生成と再構成ーシステムと相互性」では「異世代間相互形成論」を、そして「森昭の教育人間学」(玉川大学出版部『日本の教育人間学』平成11年刊行予定)では「人間形成論の学問論」を、新たな仕方で議論し直した。この人間形成論の新たな展開については、これから5年程度の期間であらためてまとめる予定である。

高等教育に関連するこれまでの私の仕事は、人間形成論の部分的・具体的展開である。私は、我が国のこれまでの高等教育に関連する業績の不毛さを克服する方途を、この方向に見いだそうと試みてきたのである。

これまでの我が国の高等教育に関連する研究業績は、自分の日常的教育実践を棚に上げた離人症的なマクロレベルアプローチであるか、蛮書取調所まがいの海外情報輸入業者の仕事であるか、さもなければ普遍化志向を欠いた自閉的実践報告であるかに限られてきた。実践とは無縁な離人症の仕事を除くとすれば、必要なことは、実践の自閉性を何とかして免れて、日常的な実践の蓄積からいわば「ボトムアップ」で、実践の一般理論を構築することである。この理論的指向性の彼方に、「大学教育学」が結像する。その際、大学教育という枠内で特殊な異世代間相互形成を論ずるこの「大学教育学」は、上述の人間形成論の部分的・具体的展開である。

大学教育学に関連する仕事は、公開実験授業やKKJ(京都大学/慶應義塾大学連携ゼミ)などの実践的蓄積を土台として、これらへの現象学的・生態学的アプローチをまとめる仕方で、進めてきた。遅々として進まない、もどかしく非生産的な仕事ではあるが、センタースタッフをはじめとする関係者たちの献身的な協力で、私には、研究のこの面が今後向かうべき方向が徐々に明らかになってきている。これを個人的にまとめる仕事も、5年を目途に考えたい。

【個人の教育評価】

教育活動については、私は、上で述べた2つの実験的な試みを通じて、自分の20年以上の教職歴を自覚的反省的に振り返ることができた。授業を方法的に反省するなら、私は、きわめて保守的で反動的な教師であり、しかもそれを十分に悔い改めようとはしていない。反省の必要性和実践的変革の困難との間で、揺れ続けているのである。

大学院教育学研究科での大学教育学の後継者養成は、まだ端緒についたばかりである。私たちの講座へ学生を入学させ教育するというまったくの初発的な課題から始まって、関連する課題は、山積している。そもそもくそれ自体が生成しつつある特殊な分科>の後継者養成は、どのようにして進められるべきか。私たちのように自分の基準となる分科(教育哲学、臨床心理学、実験心理学など)をしっかりと持たせる形での養成を考えるべきか、あるいは生成しつつある大学教育学に徹底的にはめ込んでいく仕方で養成を考えるべきか。このかなり原理的な問題についても、適切な回答を出しあぐねているのが、私たちの現状である。

後継者養成と関連して、<それ自体が生成しつつある特殊な分科>である大学教育学に関して、現時点で可能なテキストをつくる必要がある。そのようにできあがったテキストそのものが、私たちの研究・教育活動の当面の出発点なし土台となるはずである。以後これを、実際の研究教育活動の深まりとともに、じょじょに修正していくこともできるのである。このテキスト作成についても、平成12年度には取りかかる予定である。

【センター内活動の評価】

私たちは、公開実験授業やKKJなどの実験的な日常業務を達成することを通して、センターの研究協力体制を組織化してきた。その具体的成果はともかくとして、見方によれば私たちは、ただひたすら過剰な負担を自分たち自身で背負い込んできたのである。十分に潤沢とはいえない物的・人的条件の下で、私たちは、これまで良くしのいできたものだとも考える。しかし今後は、私自身も含めてスタッフみんなが、ただ闇雲に頑張るのではなく、効率的な力の配分などを考えなければならない。センターの業務は、設立5年目で、あらゆる領域で飽和点に達しつつあるように見える。私たちは、業務の継続と分担の再配分を、頃合いに、はからなければならない。

センターのスタッフは、現行の体制の下では全員が、研究面でも教育面でも組織面でも、いささか過剰な責任を負っている。センターの運営、教育学研究科の運営、2つの実験授業、教養課程の授業、大学院の授業、学内・学外へのさ

さまざまなサービス業務、定期的な研究会やフォーラムの組織・運営、来訪者の接待、研究、学会活動など。歴代のセンター長のタイムリーで有効な助力があり、学内外の親身な協力があり、センタースタッフ全員の献身的な努力が結集して、これまで何とかしのいできた。しかし、スタッフに限って言えば、蓄積する疲労感で、少しくんざりしてきているのではあるまいか。少なくとも私はそうだが、これは、私以外のスタッフ全員の実感でもあると、推察する。私たちの概算要求が認められて、新たな責任体制を作り上げることができれば、とてもありがたい。

【センター外活動の評価】

大学教育に関するミクロレベルアプローチをめざす組織は、全国的に見ても他にあまりない。そのために、FD活動の社会的需要が増すにつれて、関連するサービス業務が加速度的に増えている。これは本センターの社会的責務でもあるので、避けるわけにはいかない。このようにして依頼される仕事をたんに受動的にこなすだけでなく、関連する組織と連携するための絶好の実質的機会として、積極的に生かさなければならない。この点、私は、十分とはいえないまでも、可能な限り努力を重ねてきた。

FD活動に限らず、公開実験授業、KKJ、公開研究会、フォーラム、共同研究、共同調査などあらゆる機会をとらえて、組織的連携の道を探ってきた。この個人的組織的努力は、すでに本文で述べたように、幾分かは実ってきている。

2) 平成10～11年度現在までの業績 (1998.4～1999.7)

【著作・論文等】

- 田中毎実 1998 大学教育における授業の構造と構造化 京都大学高等教育教授システム開発センター紀要 京都大学高等教育研究第4号2-14頁 (1998. 9)
- 田中毎実 1998 書評 西平直著『魂のライフサイクル—ユング・ウィルバー・シュタイナー』 教育哲学会 教育哲学研究 第78号73-79頁 (1998. 11)
- 田中毎実・石村雅雄・大山泰宏・溝上慎一 1998 共同研究/京都大学における公開実験授業の成果と課題 大学教育学会 大学教育学会誌第20巻第2号 177-186頁 (分担177-8、182-6頁) (1998. 11)
- 田中毎実 1999 教育学教育における学問共同体の構築と教育学の生成—公開実験授業の試みから (日本教育学会第57回大会シンポジウム2「教育学」教育の課題と地平—教育と研究の関連を問う) 日本教育学会 教育学研究66巻1号 37-39頁 (1999. 3)
- 田中毎実・石村雅雄・大山泰宏・溝上慎一 1999 平成9年度公開実験授業の記録 京都大学高等教育教授システム開発センター 京都大学高等教育叢書4 1-176頁 (1999. 3)
- 田中毎実 1999 生涯教育から見る発達 (日本心理学会公開シンポジウム発表原稿) 京都大学大学院教育学研究科 臨床教育学講座 臨床教育人間学年報第1号 26-38頁 (1999. 3)
- 田中毎実 1999 近代教育思想を読みなおす 新曜社 184-199頁 (分担「教育関係の歴史的生成と再構成—システムと相互性」) (1999. 4)

【学会報告等】

- 田中毎実 1998 大学授業における構造の構造化 大学教育学会第20回大会 (1998. 6 国際基督教大学)
- 田中毎実 1998 教育学教育における学問共同体の構築と教育学の生成—公開実験授業の試みから— / シンポジウム2「教育学教育」 日本教育学会第57回大会 (1998. 8 香川大学)
- 田中毎実 1999 大学授業をどう変えるか—研究から実践へ 第5回大学教育改革フォーラム/司会 (1999. 3 京都大学高等教育教授システム開発センター)
- 田中毎実 1999 授業実践・授業研究・相互研修 京都大学公開実験授業をてがかりにして 高等教育学会第2回大会 (1999. 5 筑波大学)

【所属学会】

日本教育学会/教育哲学会/教育思想史学会 (理事) /カリキュラム学会/大学教育学会/高等教育学会

【FD 講演等】

茨城大学 (1998. 12) 新潟大学 (1999. 3) メディア教育開発センター (1999. 3) 関西大学教職員組合 (1999. 4) 鳥取大学 (1999. 4) 福井大学 (1999. 5)

【その他】

メディア教育開発センター研修事業委員会委員

3. 大学教授法研究部門・助教授 石村雅雄

1) 自己評価

【専門】 高等教育制度・政策、大学教育学

【個人の研究評価】

個人の研究テーマは、大学の管理・運営の研究である。この分野（50年代後半から70年代前半にかけて執筆された膨大なものを含む）では、制度の生成・「発展」過程の研究を基礎として、そこにおける理念と実態の解明から、現状の問題点、課題を明らかにしようとするもの（日本の主として明治後期からの生成過程をみたものとして寺崎昌男等）、外国（主として、というよりほとんど米国、ドイツ）との比較研究により課題に迫ろうとするもの（潮木守一、喜多村和之、高木英明等）、現状についての調査から制度の実態と理念とのずれ、課題を指摘するもの等の先行研究がある。こうした研究は、①「大学とは何か」（＝大学はどうあるべきか）という理念論からの課題設定がなされるか、②現にあるものとしての「大学」が無前提的に設定され、それへの妥協の仕方としての課題設定が為されるか、のいずれかに収束していると考えられる。また、そのいずれも、「大学」の各アクター（近年比較研究の方面から消費者としての学生に論及しているものはあるが）に注目して論を進めているものは少ない。

しかし、もはや①の方向からのアプローチでは管理・運営原則の解明に限界があることが明らかであり、かといって、②の方向からは、個別の妥協策が山積みされるだけで、リアルな管理・運営の実態に迫り、かつその原理的な解剖を可能にするものではない。従来わたしの、主としてフランスの大学の管理・運営法制を素材とした研究は、以上の日本の高等教育制度研究の問題点を意識して、それを乗り越えるべく展開してきたつもりであったが、今、本センターの実践に裏打ちされたミクロな研究、そして、それを担い、生成せんとするエネルギーな研究者集団に接して、これまでの研究も①の空想論を排除しよう意識するあまり、結局は②の無前提的な、どこにあるのかわからないような大学の管理・運営を結論的に述べる構成となっており、この限界を脱して、検討し直す必要がある。

求められるべきは、現に存在する高等教育機関の機能・役割を帰納的に追求しつつ、その作業を実践的に遂行（この面がなければ、所詮は「絵空事」の管理・運営論の展開に留まらざるを得ない）し、理論的な検討を行う（あるもの、ありしものを乗り越え、あらたのものを生成していく。ヴェーバーの官僚制分析がてがかりになるとの示唆を得ている）ことである。その始めの作業として、その機能・役割のうち「高等教育教授システム」として把握される部分に注目して、分析を進めている。つまり、高等教育機関の教授機能を中核とする一連の要素が相互に作用して構成されている全体を「高等教育教授システム」と名付け、そこに関わる各アクター（教員、学生、職員等）、アクター間の相互関係及びそこに影響を及ぼす諸環境（財政、「社会」からの要求、国際化、情報化等）について考察し、「高等教育教授システム」に関する目的の設定、目的に対する達成状況、組織化の現状及び課題を解明する。より具体的には、FDを進める上での意思決定過程の分析、とりわけ組織的・人的な障壁の分析（より具体的には、公開実験授業の組織への周知過程、阻害要因等の問題、さらには、公開実験授業及び授業検討会を如何に組織化していくのか、して良いのか、という問題）、京都大学の学生が「現に」大学に対して持っている要求が、大学の諸機能によって如何に変容していくのかを、学生と教員、職員、そしてその総体としての京都大学という各アクター間の関係において解明（当面は、個々の学生、学生間、教員－学生間における変容）する作業、そして、大学評価という機能が一機関、そしてそこにある各アクターに如何に受容され、若しくは部分的に排除されていくかを描く作業等をしつつある。

このほか、わたしは、次の2つの共同研究に参画している。

①平成8年より、アジア諸国から日本の大学への留学生の「学力」を検証するプロジェクトに参画し、ベトナムでの具体的調査、分析を経て、そこで得た知見、すなわち「大学」とか「高等教育機関」で得られる「知」の中身、それを得るために必要な前提の相対的状況等を基礎として、後述するセンターでの神藤との共同研究につなげている。

②主として、若手の教育経営、教育史研究者で組織されている TEES (Teacher Education & Educational Science) 研究会に属して、 α 「教育学部」の設立過程の歴史的研究（毎年日本教育学会で報告）、 β 教員養成教育の二大原則（「開放性」「大学における養成」）の世界史的分析（毎年日本教育学会ラウンドテーブルで報告）、 γ 教育学教育のコアを模索する教科書作成とそれをを用いた会員の大学教育実践分析に携わっている。とりわけ、 α は、戦後の教育学が陥った陥弊の分析等、本センターが今後大学教育学を構築していく上で重要ないくつかの示唆を与えうるものであると考えている。

【個人の教育評価】

全学共通科目として、平成9年度より他のセンター教官の助力も得て「大学あるいは高等教育論」を提供してきた。この科目は、大学の今について、受講生が自らの頭で考えてもらう、若しくは、そのきっかけを持ってもらうことを目標として、主として各回話題提供のような形でリレー式で行ってきた。初年度は登録者も200名強、常時出席者は100名弱であり、若いセンター教官の努力もあって、学生の顔が見える「楽しい」講義を展開することができた。学生の大学に対する（ひいては自らの大学生生活に対する）問題意識は確実に刺激され、最後に試験の形で問うた「自らにとっての大学の意味」は、一部のふざけた答案を除けば、借り物ではないしっかりした意見を論述するものが多く、見事なものであった。学生たちにとっても、こうした内容の講義がなかったこと、問題提起型の講義スタイル、教授者との年齢的近さ等もあって概ね好評だったようである。しかし、この故もあって、状況が変わるのは、2年目以降であり、1,000名を越える登録者、300名近い出席者を前にして、如何にすべきかの答を見出せないでいる。「楽勝科目」との評判を覆すべく、その年の評価は前年よりも厳しく行い、結果、1割強の不合格者が出たものの、3年目の登録状況は変わらなかった。わたしには、これ以上のきびしさ（不合格者を増やすこと）は無理である。3年目にあたる本年度には、人数制限の可否、そしてその理由を受講希望者に聞くことまで行った。そこでは、人数制限を可とする者も半数弱いたが、その理由は積極的理由というより、仕方がない、運命だというようなもので、わたしが、人数制限をする旨を明確にはシラバスに記さなかった手続き的瑕疵もあって、今年も人数制限を導入せず、課題の提出回数を増やす形で自然減を待っている状態である。来年は、人数制限をせざるを得ないだろうが、講義、そしてそれを契機とする学生の学びにおける教員の果たすべき役割を含めて、人数制限の「合理的」理由を考えている最中であるが、未だ暗闇に囚われている。

このほか、本年度からは、全学共通科目として、ポケットゼミを担当し、センターの「ライフサイクルと教育」「教育とコミュニケーション」の講師も一部担当しているが、未だ進行中でもあり、総括はもう少し時間を置きたい。

大学院での教育としては、平成10年度より「高等教育開発論」の特論（平成10年度はⅢ、平成11年度はⅡ）を担当している。受講者は、教育学研究科の教育社会学及び比較教育学を専攻する大学院生がほとんどである。内容は、各自の問題意識に沿って、高等教育と緩い分野の枠を設定して、わたしのものを含めて、各自の論文検討、論文紹介を行っている。受講者の質の高さ、受講者の専門の微妙な違い、わたしが投げかけるセンターの研究状況からの問題提起がマクロ研究を中心とする受講者に適度に刺激を与えていることもあって、各回ともおもしろい展開を見せている。しかし、こうした在り方は、既存のマクロ研究が前提としてあり、そこから適度な距離を持っていることからのおもしろさでもあり、「高等教育開発論」の特論、とりわけ、社会学的アプローチを大学教育学の基礎として如何に活用し、成果を創出していくかに関わる内容の見直しを図る必要があると考えている。

【センター内活動の評価】

わたしがセンターに来て、少なくとも一昨年までは、次々と目の前に来る「仕事」をひたすらこなしていた。その「仕事」は時に、研究的でもあったが、多くは、事務作業であった。教育学部事務官との研究室工事をめぐる執拗なまでの折衝、フォーラムのポスターの折り曲げ、封入、発送、印刷業者との交渉・・・その中でも個人研究はまだしも、センターとしての研究は「いつか」できるだろうと思い、自分がそこにいるのに、それをできるようにすることなどには考えが及ばなかった。そして、事務仕事をすることで、免罪符を得ようとしていた。ここ数年、事務補佐員の方の増員、仕事の合理的な進め方の工夫等によって、センターの共同研究の条件は保障された。そして、田中教授を中心とす

る公開実験授業・検討会、KKJに関わる試み、大学教育学を構築していく試みなどが、急速に進んでいる。わたしは、引きずられるように、いや、引きずってもらって、その試みに参加させてもらっている。今、個人の自己評価を書いていると、この試みへの参加が確実に自分の変化を促し、新たな研究・教育のステージに立っているのだと感じる。自らの研究の制度化により、忘れていた知識、発想が、蘇りつつあるのが現状である。少なくともこれからは、この試みを引っ張る側とは言えないまでも、横、そして後ろから支え、見張りをする役割を担い得ないものかと考えている。具体的には、公開実験授業・検討会に掛るFDの「組織化」の検討、公開実験授業も含めた大学授業における教員の位置、役割の解明、そして、神藤助手と進めている日本における中等教育と大学教育の接続研究（現在のところ、それぞれの期間で必要とされる「学習方略」の分析が必要ではないかとの着想を得、基礎調査を行っている）が当面の課題である。そして、こうした作業の総括的作業として、大学教育学の構築があるのだと捉えている。

2) 平成10～11年度現在までの業績（1998.4～1999.7）

【著作・論文等】

石村雅雄「研究情報：フランス」（『日本教育経営学会紀要』第40号）（1998年6月）

石村雅雄「公開授業における相互研修の効果と問題点」（『京都大学高等教育研究』第4号）（1998年10月）

田中毎実・大山泰宏・石村雅雄・溝上慎一「共同研究／京都大学における公開実験授業の成果と課題」（『大学教育学会誌』第20巻第2号）（1998年11月）

石村雅雄「ベトナムにおける高等教育セクターに対する資金調達」（日本教育制度学会『教育制度学研究』第5号）（1998年11月）

石村雅雄・井上義和・神藤貴昭他『大学教育の改善に関する京大教官の意識』京都大学高等教育叢書5、1999年3月。
近田政博・石村雅雄「ベトナム」（馬越徹編『アジア地域の中等教育の内容と評価法に関する調査研究 研究成果報告書』名古屋大学大学院教育学研究科）（1999年3月）

石村雅雄・米澤彰純「フランス」（阿部博之代表『大学評価機関に関する研究（中間まとめ）』大学評価機関に関する研究会）（1999年6月）

【学会報告等】

溝上慎一・石村雅雄・梶田叡一「京都大学の卒業生は大学教育をどうみているか——戦後50年、4学部の卒業生の意見調査から——」（高等教育学会第1回大会、広島大学）（1998年5月）

石村雅雄「公開実験授業の成果と課題（その2）——大学授業研究における『参観者』の変化」（大学教育学会第20回大会、国際基督教大学）（1998年6月）

石村雅雄「学生の『学び』の実態——京都大学アンケート調査から——」（京都大学高等教育教授システム開発センター第24回公開研究会、京都大学）（1998年9月）

田崎徳友・石村雅雄（オーガナイザー）「相互発信の時代へ：21世紀を展望する日本とフランスの教育改革——次代を創る教育体系への挑戦——」（日仏教育国際シンポジウム TOKYO 1998、日仏会館）（1998年9月）

馬場将光・清水一彦・石村雅雄（企画）「課題別セッション：高等教育評価システム」（日本教育制度学会第6回大会、帝京大学）（1998年12月）

石村雅雄「大学教授法研究のあり方について——京都大学高等教育教授システム開発センターの研究活動から——」（名古屋大学高等教育研究センター第1回国内研究者交流セミナー、名古屋大学）（1999年1月）

石村雅雄「課題研究 大学評価のポリティックス——世界と日本——」におけるフランスの報告（高等教育学会第2回大会、筑波大学）（1999年5月）

石村雅雄「大学における授業検討会の成果と課題——京都大学公開実験授業を手がかりに——」（大学教育学会第21回大会、倉敷芸術科学大学）（1999年6月）

【所属学会等】

日本教育学会／関西教育学会／高等教育学会／大学教育学会／民主教育協会(IDE)／日本教育社会学会／日本教育工学会／国際開発学会／アジア比較教育学会／日本比較教育学会／日本教育制度学会／日本教育経営学会／日本教育行政学会／フランス教育学会／日仏教育学会

【その他】

文部省大学評価機関（仮称）創設準備委員会専門委員

国立学校財務センター「大学の設置形態と財務に関する比較研究」研究委員会客員研究員

関西国際大学高等教育研究所客員研究員

同志社大学文学部嘱託講師

4. 大学教育評価システム研究部門・助教授 大山泰宏

1) 自己評価

【専門分野】 臨床心理学，大学教育評価

【個人の活動評価】

個人活動としては、臨床心理士として心理療法に従事している。およそ週に10数人のクライアント（来談者）と会い、精神科診療所や大学の心理教育相談室で面接をおこなっている。週に10数人というのは、決して多い数ではない。しかしながら、本務として高等教育研究に携わりつつ、心理臨床の実践を続けていくのは、意外と労力を要するものである。正直なところ、自分の持てるエネルギーのおよそ半分は、臨床心理学関係の仕事や研究に注がれている。だが、それだけでは語りきれない多くのものを、この仕事から得ているのも事実である。

心理療法に訪れる人々は、まさに現代が抱える時代的な病とでもいうものを、先取りしている人々である。不登校の子どもたち、アイデンティティ確立が難しい青年たち、あるいは戦後のわが国の急速な変容のひずみを引き受けている大人たちに関わっていると、この時代に生きるとはどういうことなのか、他者ととともに在るとはいかなることなのか、共同体の中で生きるとはいかなることなのかということ、自然と考えるに至る。その中で模索しているものが、高等教育研究を進めていくうえで、私の大きな発想の源となっている。たとえば、学生相談の研究である。わが国の学生相談は、心理療法的関わりを主体としているが、それだけでは必ずしも適切なあり方とは言えない。学生が日常的に生きる世界も含めてトータルな援助体制を高等教育機関の中において考えていかなければならないのである。これは私自身が、心理療法と日常生活世界の連結について考える中から見えてきた事柄である。また、授業研究や相互研修の方法論についても、心理療法からのヒントは大きい。すなわち、疑似客観的な授業分析ではなく、授業の行為者（授業者）がどのように考えどのように振る舞ったかという、授業者の主観的世界の展開を重視した授業分析方法、そして、その主観的世界を他者が辿りなおして生きるということを通じた相互研修の可能性についての考察である。これは同時に、学習者中心の学習理論につながると同時に、評価理論とも連結してくる事柄である。その成果は、この評価報告書の理論的部分に見られるとおりである。また、さらには、教養教育論に関しても心理療法を通じて考えたことからヒントを得ている。不登校や学級崩壊などの現象に関わるにあたって、教育とは何か、学校とは本来どのようなものなのか、他者ととともに生きるための知恵とはいかなるものなのかといったことを考えざるをえない。その過程を通じて、学びの共同体としての学校のあり方について、現在研究しているところである。

さて、本来の専門であった臨床心理学においては、残念ながらこここのところ、実践的活動にとどまり、この分野での研究をまとめることをしていない。しかしながら、今度は逆に、高等教育研究を通じて学んだことや考えたことを、臨床心理学の研究にも逆に応用できるのではないかと考えている。それに関しては、近々まとまったものを執筆する予定である。

2つの領域をともにこなしていくのは、正直なところかなりエネルギーのいることである。時々、どちらか一方であるとどれだけ楽であろうなどと夢想する。しかし、自分はやはりその両方に足をかけ、バランスをとりながらやっ

くしかない。それこそ片足だけでは、簡単に倒れてしまうことであろう。その両分野の葛藤の中から何かを生み出していくことが、自分の仕事だと最近は観念している。

【センターでの活動評価】

・個人の研究活動

今年度で、高等教育教授システム開発センター赴任3年目になる。最初は、助手として平成9年の4月に採用された。平成9年度には学生相談に関する研究をおこない、本センターの紀要である『京都大学高等教育研究 第3号』にまとめた。同時に、九州大学健康科学センターの吉良助教授を中心とする学生相談に関する科研に関わり、報告書に論文を掲載した。学生相談に関するこの研究は、厚生補導や学生相談関係者から一定の評価を受け、平成10年度には、京都大学学生部、全国学生相談研究会議、全国大学メンタルヘルス研究会から、講演やシンポジウムの依頼を受けている。

平成10年度は、メキシコでの国際学会での発表、公開実験授業での授業研究などを通じて、教育学についての研究を広げていった。また、この年は、臨床心理学関係の論文をいくつか書いたり、学会発表、講演などが多かったように思える。したがって平成10年度の前半は、高等教育の研究自体はほとんど停止していた。しかしながら、公開実験授業を通じた研究において、現象学的社会学やエスノメソドロロジーの手法を取り入れることで、先述した授業者の主観を重視した授業研究の方法論を考えるに至り、その結果を『京都大学高等教育研究 第4号』にまとめた。平成11年1月1日付けで助教授に昇進したが、その後の活動は、当センター主催の大学教育改革フォーラムでの問題提起をはじめ、「入れる」より「出す」ほうが多かったように思える。

平成11年度に入ってから、講演や非常勤の回数をできるだけ減らすようにして、研究に打ち込める体制を少しずつ作るようにしている。11年度にはいってこれまでの大きな仕事は、やはり、自己評価/外部評価の理論と実施のための策定をおこなったことである。授業研究のほうは、かなりアイデアの飽和状態で、実際、ひとつの論文をまとめるにあたり、ひどく長い日数がかかっている。平成11年度に入ってから、学会発表が後回しとなり、ひどいことに一度も発表していないが、今後は折りを見て、研究成果を公表していくようにしたいと思う。

・個人の教育活動評価

平成9年度より、大学院教育学研究科臨床教育学講座、すなわち私の出身講座で、大学院生の研究指導のために設けられた授業に、学内非常勤講師として関わっている。そこで期待されている役割としては、大学院生の研究を広い学問分野との関連性の中かから指導すること、統計の使用法に関して指導すること、などである。その関係もあって、毎年10人以上の臨床心理学関係の大学院生や学部学生が、私のもとに修士論文や卒業論文の指導を求めてやってくる。昨年末までは、それに対してひとりあたり少なくとも2週に1回は時間をとって相談に乗ることをしていた。しかしながら、本来は私は彼等の講座の教官でもないし、ましてや指導教官ではない。したがって、センターでの仕事が多忙となるにつれ、彼らの個人的依頼は断らざるをえなくなってきた。これは致し方ないことである。今後、当センターの講座である高等教育開発論の大学院生が増えることが予想されるが、そこで再び論文指導を開始することとなる。

今年度より大学院科目として、「高等教育論特論Ⅲ」を担当している。内容は学生サービスに関するものであるが、その歴史や理念の変化を、広く世界情勢や思想史などの関連から考えていくものである。演習の進め方としては、そのときそのとき疑問に思ったことなどを調べていくもので、形としては、一種の問題解決型学習の方法論をとっている。この方法をとると、さまざまな知識が有機的に連結され学生の動機付けも高いが、進度がかかり遅くなるのは、この学習法の共通の悩みの種であろう。

全学共通科目では、平成9年度からは「『大学』あるいは高等教育論」、平成11年度からは「ライフサイクルと教育」「教育とコミュニケーション」で数回授業を担当した。いずれにおいても私の常として、一時間の授業に大変な準備と労力を使ってしまい、特に大教室での講義ではかなり消耗してしまう。当センターが授業研究をおこなう機関として、ある程度ひとつの授業の究極の形とでもいうものを、個人個人が努力して実践していかなければならないが、これは言ってみれば、小中学校での研究授業を毎週担当するようなものである。したがって、自分が毎週続けられ、かつ、決して質を落とさない授業実践というものを、これから身につけていく必要があると痛感している。そうでなければ、どんなに力を入れた授業研究や実践も、日常の授業の改善にはつなげていけないからである。

・センター内活動の評価

平成9年度に助手として赴任した当初の仕事は、国際交流担当が主であった。当センターで、招へい外国人教授を2名迎えることとなっており、そのための手続きや交渉などを担当した。これがきっかけで、メキシコでの国際学会に招待されたり、海外の研究者との交流が現在も続いている。また、平成10年度、11年度には、科学研究費萌芽的研究「高等教育の一機能としての学生サービスの研究 ― わが国にでの実現へ向けて ―」を得ることができ、これによって米国を中心とした学生サービスの実践者・研究者との接触をおこない、成果をまとめつつある。

センター内活動に関して全般的に考えてみるならば、田中教授を中心として次々に打ち出されるプロジェクトに、一歩遅れてついていったように思える。すなわち、自分で何か新しいことを企画したりするのではなく、与えられた仕事をこなしていったというニュアンスが強い。これはこれで、センターの活動の5年間を振り返れば、活動の基盤や方向性を固めていくのに重要なことであったと思える。おそらく今後は、この基盤をもとにして、積極的に外との交流を持つことが、次のステップへ向けて大切なこととなる。特に海外交流など、私を中心となってやるべきプロジェクトを企画していきたいと考えている。

・センター外活動の評価

センター外の活動としては、先述したように、精神科診療所や心理教育相談室での心理療法が主である。これに関連して、甲南大学の大学院生のスーパーヴィジョン（初心のカウンセラーの心理療法を指導すること）をおこなっている。また、奈良市教育委員会での教員のためのカウンセリング講座、日本赤十字病院関係の看護婦や看護学生の指導などにも従事している。

高等教育研究関係では、心理臨床学会のカリキュラム委員会特別委員として、臨床心理士養成のための大学院カリキュラムの編成に関わっている。また、学生相談関係の講演などの依頼をいくつか受けていることも、先述したとおりである。

全般として、しかしながら、大学教員としては学会での発表が、極端に少ない。これは、日々の仕事の優先順位の中でどうしても後回しになってしまっているのだが、研究者の本務として、今後は力を入れて行かねばなるまい。

2) 平成10～11年度現在までの業績 (1998.4～1999.7)

【著作】

大山泰宏 「性格について」 氏原寛・杉原保史（編）『臨床心理学入門 ― 理解と関わりを深める』、培風館、55-70頁、1998年10月。

大山泰宏 「重症対人恐怖症の心理臨床」 山中康裕、河合俊雄（編）『心理臨床の実際（第5巻）、境界例・重症例の心理臨床』、金子書房、186-198頁、1998年12月。

田中毎実・石村雅雄・大山泰宏・溝上慎一 平成9年度公開実験授業の記録 京都大学高等教育叢書4、1999年3月25日。

【論文】

大山泰宏 「授業のフレームと日常の知 ― 「なんでも帳」を主とした相互行為分析を通して ―」、京都大学高等教育研究、第4号、65-81頁、1998年10月。

田中毎実・大山泰宏・石村雅雄・溝上慎一 「共同研究／京都大学における公開実験授業の成果と課題」、大学教育学会誌、第20巻、第2号、177-186頁、1998年11月。

大山泰宏 「学生サービスとメンタルヘルス ― 高等教育論の立場から ―」、第20回全国大学メンタルヘルス研究会報告書、31-35頁、1999年5月。

【翻訳・書評】

大山泰宏（翻訳）「米国における大学改革：ハーバードの場合」、京都大学高等教育研究、第4号、152-159頁、1998年10月。原著：James Wilkinson, "The University Reform in the United States: A Case of Harvard", 18th Monthly Open Seminar, Research Center for Higher Education, Kyoto University. (October 31, 1997).

大山泰宏（書評）「P.G. アルトバック（他）編著、高橋靖直（訳）『アメリカ社会と高等教育』」、大学論集、第29集、
広島大学大学教育研究センター、279-280頁、1999年3月。

【学会報告等】

Yasuhiro OYAMA “The Paradigm of Education--An example of Japan”, IV Congreso Internacional de Education, Universidad de
las Americas, Puebla, Mexico. (April 22, 1998)

大山泰宏 「京都大学における公開実験授業の成果と課題（その1） — 何でも帳などの学生の反応を中心に —」、
大学教育学会第20回大会（国際基督教大学）、1998年6月。

高月玲子・大山泰宏・稲塚葉子・松浦ひろみ・久野晶子・後藤智子 「臨床的観察機能の研究 — 乳幼児母子対の行動
観察を通して（1）映像観察課題の設定と観察過程分析の試み」、日本心理臨床学会第17回大会（名古屋大学）、1998
年9月。

大山泰宏・高月玲子・稲塚葉子・松浦ひろみ・久野晶子・後藤智子 「臨床的観察機能の研究 — 乳幼児母子対の行動
観察を通して（2）観察指標を用いた観察結果の分析」、日本心理臨床学会第17回大会（名古屋大学）、1998年9月。

【講演・シンポジウム】

京都大学厚生補導担当教官研究会（講演）「SPS（学生助育）と大学の理念」、京都大学、1998年11月。

奈良大学学生相談室第6回シンポジウム（シンポジスト）、1998年12月。

第32回全国学生相談会議（シンポジスト）、東京大学、1999年1月。

第20回全国大学メンタルヘルス研究会「豊かなキャンパスライフの創造に向けて」、（教育講演）「学生サービスとメン
タルヘルス — 高等教育論の立場から —」、（シンポジウム）「大学メンタルヘルスの行方 — 過去・現在・未来
—」、香川大学、1999年1月。

第5回大学教育改革フォーラム「大学授業をどう変えるか — 研究から実践へ —」（問題提起）「相互行為分析の観点
から」、京都大学、1999年3月。

【社会的活動等】

京都第二赤十字病院「エキスパート研修」講師、1998年2月、9月。

敦賀児童相談所「のびのび合宿」スーパーヴァイザー、1998年3月、10月。

大津赤十字病院「臨床指導者研究会」講師、1998年7月。

奈良市教育委員会「カウンセリング講座」講師、1998年7月、1999年7月。

大阪市環境保健局「看護職員研修会」講師、1999年1月。

京北町保健センター「教育講演」講師、1999年2月。

京都第二赤十字看護専門学校「教育キャンプ」コーディネーター、1998年3月、1999年3月。

京都第二赤十字看護専門学校非常勤講師、1998年、1999年。

大津赤十字看護専門学校「人間関係論Ⅱ」講師、1999年3月。

【所属学会など】

日本心理臨床学会／箱庭療法学会／大学教育学会／高等教育学会／全国大学メンタルヘルス研究会

【その他】

日本心理臨床学会「カリキュラム委員会」特別委員、1999年5月～。

5. 大学教授法研究部門・助手 溝上慎一

1) 自己評価

【専門】自己論・青年心理学

【個人の活動評価】

青年心理学を大枠としながら、大学生の自己や生き方について研究をおこなっている。自己や生き方を切り口に大学生を見ていく場合、これまでは平均的な結果を出す研究法が一般的であったが、筆者は、最低限これだけは大学生を分けて考えなければならないだろうというタイプ論的な研究法を展開している。昨年は、大きな共同研究プロジェクトとして、学生ら140人とともに1200名の大学生・インタビュー調査をおこなった。現在その結果をまとめている最中であり、近々出版を予定している。

しかしながら、タイプ論を展開するということは、個人の豊かな情報につきあっていくということであり、細かな情報をどう処理しながら全体的な把握をおこなっていくかという方法論的なジレンマにもぶつかってしまっている。現在、心理学の世界では、平均的な研究法から、フィールドワーク、ナラティブ・アプローチ、エスノメソドロジーといった他分野の方法論を取り入れた研究法が盛んになってきているが、筆者は、その中間的な立場をとりたいと考えながら方法論を検討している。すなわち、Majorityではどうかという発想も大事であり、かつそこからずれてくる部分にも同時に言及していける、そういう立場である。

今年は、2年がかりで執筆してきた単著がやっとのことで公刊される。一区切りの成果ではあるが、非常に嬉しく思う。しかし、前へ一歩進んだかと思うと、次の課題が出てくる。最近では、この繰り返りで、課題が二次曲線的に山積みされていく気分である。一つずつ片づけていこうと思う。

【センターでの活動評価】

平成10年度は、公開実験授業の3年目にあたる。初年度は、実験授業におけるビデオの役割や意義について検討し、2年目からは授業過程分析をおこなうための研究法の構築に着手しはじめた。もともとは、授業改善やFD活動といった大学教育改革の全国的な動きの中でよくとりあげられる授業評価アンケートの検討から出発したわけであるが、それが、授業終了後、あるいは学期終了後におこなわれる総括的評価であることに問題を感じ、授業過程そのものに焦点をあてていく研究法へと問題意識がシフトしていったわけである。平成10年度は、そうした授業過程をダイレクトに評価する指標として、学生の「顔上げ」行動の研究をおこなった。これによって、授業者の授業目標に照らし合わせた授業展開をベースとし、かつ、そのときどきの学生の反応を追うことができるようになった。学生の「顔上げ」行動指標により、授業研究の方法論を一つ確立できたように思われた。

ところが、授業過程分析ができるようになって浮上してきた新たな問題は、授業者の授業スキルが、良い授業をおこなっていく上で実はそう問題ではないのではないか、ということであった。すなわち、授業改善においては、授業スキルの向上を目指す方向性が世の中の一般的な見解であるが、授業スキルは、学生にとっての授業者の「存在」が前文脈として成立した上ではじめて問題とされるべきものではないかと考えられるようになったわけである。本年度は、このような観点にもとづいて、学生にとっての授業者の「存在」、ひいては、「存在者」としてのポジションをつくりあげ、維持していくための授業者－学生の相互行為の循環について研究を展開している。

慶應義塾大学・井下ゼミとの合同授業（KKJ）では、「学生の学びによる成長」をテーマとした共同研究を展開している。KKJは、学生が自らテーマを設定し、授業をつくりあげていく「主体的参画授業」であるが、これまでの授業実践研究では、主体的な参加授業の良さが唱えられることはあっても、学生が、結果何を学んだのかということへのアプローチはきわめておざなりであったように思われる。本研究は、「高度一般教育」「自己形成／人間形成」「主体的参画授業」をキーワードとしながら、学生の学び、自己形成のダイナミズムを実証的に検討していく。現在、KKJは終了し、学生とのインタビューによるデータ収集をおこなっている最中である。

2) 平成10～11年度現在までの業績 (1998.4～1999.7)

【著作・論文等】

- 溝上慎一・尾崎仁美・平川淳子 1998 学生の満足する授業過程分析に向けて (序報) 京都大学高等教育研究、4、22-64. (1998年10月1日)
- 田中毎実・大山泰宏・石村雅雄・溝上慎一 1998 京都大学における公開実験授業の成果と課題 大学教育学会誌、20、177-186. (1998年11月20日)
- 溝上慎一 1998 授業改善に役立つ授業評価～学生が授業を評価する内面プロセスを洞察する 第4回'98FD フォーラム報告集～授業改善、教授法等の研究交流会 (大学コンソーシアム京都)、pp.109-115. (1998年12月12日)
- 田中毎実・石村雅雄・大山泰宏・溝上慎一 1999 平成9年度公開実験授業の記録 京都大学高等教育叢書4 (1999年3月25日)
- 溝上慎一 1999 自立の土台となる「自分づくり」 教育研究 (筑波大学附属小学校・初等教育研究会)、54、6、18-21. (1999年6月1日)

【学会報告等】

- 溝上慎一 1998 集団討議における「補助手段」としてのビデオ撮影 大学教育学会第20回大会発表要旨収録、75-76. (1998年6月6日、国際基督教大学)
- 梶田叡一・石村雅雄・溝上慎一 1998 京都大学の卒業生は大学教育をどうみているか 日本高等教育学会第1回大会発表要旨収録、98-101. (1998年5月30日、広島大学)
- 溝上慎一・水間玲子 1998 社会—個人基準を考慮した自己評価タイプにおける規定要因の特徴Ⅰ～法則定立的方法に個性記述的観点を導入したアプローチ 日本教育心理学会第40回総会発表論文集、p.141. (1998年7月19日、北海道教育大学函館分校) (座長)
- 水間玲子・溝上慎一 1998 社会—個人基準を考慮した自己評価タイプにおける規定要因の特徴Ⅱ～法則定立的方法に個性記述的観点を導入したアプローチ 日本教育心理学会第40回総会発表論文集、p.142. (1998年7月19日、北海道教育大学函館分校) (座長)
- 尾崎仁美・溝上慎一 1998 自己評価の規定要因における表現形態の検討 (Ⅰ)～ApproachとAvoidance 日本心理学会第62回大会発表論文集、p.56. (1998年10月10日、東京学芸大学)
- 溝上慎一・尾崎仁美 1998 自己評価の規定要因における表現形態の検討 (Ⅱ)～ApproachとAvoidance 日本心理学会第62回大会発表論文集、p.57. (1998年10月10日、東京学芸大学)
- 溝上慎一 1998 企画シンポジウム【心理学研究の方法論について～実証とは何か】企画及び報告 日本心理学会第62回大会発表論文集、S66. (1998年10月8日、東京学芸大学)
- 溝上慎一 1998 テーマセッション【青年心理学と高等教育】(梶田叡一企画) 報告「自己理解のプロセス～これからの青年期教育に向けて」 日本青年心理学会第6回大会発表論文集、pp.28-29. (1998年11月8日、関西大学)
- 溝上慎一 1998 授業改善、授業評価分科会報告「授業改善に役立つ授業評価～学生が授業を評価する内面プロセスを洞察する」 第4回'98FD フォーラム (大学コンソーシアム京都) (1998年12月12日、仏教大学)
- 水間玲子・溝上慎一 1999 授業過程の評価指標としての学生の「顔上げ」行動～京都大学公開実験授業をてがかりに 日本高等教育学会第2回大会 (1999年5月23～24日、筑波大学)

【社会的活動等】

- 光華女子大学非常勤講師 (1998年4月～1999年3月)
- 神戸大学国際文化学部・特別授業講師 (1998年12月)

【所属学会】

- 日本心理学会／日本教育心理学会／日本青年心理学会／日本発達心理学会／日本性格心理学会／全国大学保健管理研究集会／日本高等教育学会／大学教育学会／日独社会学会

6. 大学教育評価システム研究部門・助手 神藤貴昭

1) 自己評価

【専門】教育心理学・発達心理学

【個人の活動評価】

1999年1月に本センターに赴任するまでは、大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程において、中等教育段階を中心とした、学業活動に関するストレス過程の分析をおこなってきた。また、大学生・大学院生の論文作成時のストレス過程の分析も同時におこなった。さらに、小中学生の震災ストレス、いじめや衝動性コントロール欠如に基づく暴力的行動などのいわゆる不適応行動についてのストレス理論からのアプローチも共同研究でおこなってきた。また、最近、中学生の動機づけ方略に関する研究、職場におけるストレスの問題に関する研究も開始した。

これらの成果の学会発表はかなりおこなってきたが、特に共同研究について、中間的発表という形ではなく、論文としてまとめるという段階までには至っていない。その多くは現代的な話題でもあるので、早急にまとめてゆきたいと考えている。

次に、これまで主に中等教育段階の研究をおこなってきたことと、本センターにおいて高等教育研究に関わるこの間には、違和感があったといわざるを得ない。しかし、この違和感は、そのまま、中等教育と高等教育の接続の問題を反映しているとも言える。例えば学習ストラテジーや、学業ストレスの構造が高校と大学で質的に異なるのではないか、という点である。このような点を明らかにしてゆきたい。

また、本センターに赴任して、他の教官の分野が多様なことから、自分が今までおこなってきた研究について、内容だけではなく、方法論的にも偏っていることを思い知らされた。これまで、方法論として、心理学研究にありがちな、尺度作成と数理的検討を自明のものと考えていたが、本センターの共同研究における生態学的、現象学的アプローチが大変新鮮だったこともあり、自身の研究にも少なからず影響を与えられる。

【センターでの活動評価】

赴任して半年が過ぎたばかりであるが、いくつかの研究をおこなった。まず、公開実験授業において、授業の過程を評価する指標としての「顔上げ」行動と、教授者の意識（「のり」など）や授業遂行過程の関連を検討し、日本高等教育学会での発表もおこなった。さらに、新任教員としての自身の立場からも、教授者が「うまくいかない」事態にどのように対処してゆくかという検討も必要だと考えている。

また、これとは別に、高校と大学の接続問題についての研究を開始した。特に、従来の視点（高校までの学習内容やリメディアル教育からの視点）からぬけていると思われる、学生の学習ストラテジーや学業ストレスといった側面からアプローチできればと考えている。

さらに、慶應義塾大学・井下ゼミとの合同授業（KKJ）については、京都大学側の（教員があまり指導的には介入しなかった）授業とホームページを中心にして、学生のメタ授業的な発言や教官の介入を分析することにより、「授業」の作られ方について検討したいと思っている。そうすることによって、より自由度の高い授業において、何が実現できて何が実現できないかが明白になると考えられる。

最後に、大学教育評価システム研究部門の助手として、同部門の大山助教授と、本書をはじめとする大学の自己点検・自己評価、外部評価のあり方について、特に教員がモチベートできるあり方を考えてゆきたいと思う。

2) 平成10～11年度現在までの業績（1998.4～1999.7）

【著作・論文等】

神藤貴昭 職場におけるストレス 国際経済労働研究（国際経済労働研究所）882号、30-31（1998年8月）

西田裕紀子・齊藤誠一・神藤貴昭・佐藤真子・吉田圭吾・清水民子・柳原利佳子・山本智一・森田英夫・寺村忠司・坂口喜啓・田中孝尚 阪神・淡路大震災の心理的影響に関する研究V ― 第5回調査報告 ― 神戸大学発達科学部研究紀要、6、15-21。（1998年9月）

神藤貴昭 中学生の学業ストレスと対処方略がストレス反応および自己成長感・学習意欲に与える影響 教育心理学研究、46、442-451 1998年12月

西村亜希子・西田裕紀子・齊藤誠一・神藤貴昭・奥田剛・佐藤真子・吉田圭吾・清水民子・柳原利佳子・山本智一・森田英夫・寺村忠司・坂口喜啓・田中孝尚 阪神・淡路大震災の心理的影響に関する研究VI — 第6回調査報告 — 神戸大学発達科学部研究紀要、6、269-277. (1999年3月)

梶田亘一・田中每実・石村雅雄・大山泰宏・溝上慎一・神藤貴昭・井上義和・中井裕之 大学教育の改善に関する京大教官の意識 京都大学高等教育叢書5 (1999年3月)

【学会報告等】

神藤貴昭・齊藤誠一 いじめと学校ストレスの関連(2) 日本教育心理学会第40回総会発表論文集、p.389. (1998年7月20日、北海道教育大学函館分校)

西田裕紀子・住友育世・野上奈生・齊藤誠一・柳原利佳子・佐藤真子・吉田圭吾・神藤貴昭 阪神淡路大震災の心理的影響に関する研究(15) (日本教育心理学会第40回総会発表論文集、p.367. (1998年7月20日、北海道教育大学函館分校)

神藤貴昭 中学生の学業ストレスに関する研究(4) (日本心理学会第62回大会発表論文集、p.407. (1998年10月10日、東京学芸大学)

神藤貴昭・齊藤誠一・清水民子・佐藤真子・吉田圭吾・柳原利佳子・住友育世・西田裕紀子・奥田剛・西村亜希子 阪神淡路大震災の心理的影響に関する研究(16) 日本発達心理学会第13回大会発表論文集、p.386. (1999年3月28日、大阪学院大学)

西村亜希子・齊藤誠一・清水民子・佐藤真子・吉田圭吾・柳原利佳子・神藤貴昭・住友育世・西田裕紀子・奥田剛 阪神淡路大震災の心理的影響に関する研究(17) 日本発達心理学会第13回大会発表論文集、p.387. (1999年3月28日、大阪学院大学)

奥田剛・齊藤誠一・清水民子・佐藤真子・吉田圭吾・柳原利佳子・神藤貴昭・住友育世・西田裕紀子・西村亜希子 阪神淡路大震災の心理的影響に関する研究(18) 日本発達心理学会第13回大会発表論文集、p.388. (1999年3月28日、大阪学院大学)

柳原利佳子・齊藤誠一・清水民子・佐藤真子・吉田圭吾・神藤貴昭・住友育世・西田裕紀子・奥田剛・西村亜希子 阪神淡路大震災の心理的影響に関する研究(19) 日本発達心理学会第13回大会発表論文集、p.389. (1999年3月28日、大阪学院大学)

伊藤崇達・神藤貴昭 中学生における動機づけ方略の使用(1) 日本発達心理学会第13回大会発表論文集、p.177 (1999年3月28日、大阪学院大学)

神藤貴昭・尾崎仁美 授業過程における教授者の意識と学生の「顔上げ」行動 — 京都大学 公開実験授業を手がかりに — 日本高等教育学会第2回大会発表要旨収録、pp.80~81. (1999年5月23日、筑波大学)

【社会的活動等】

・兵庫県立総合衛生学院助産学科非常勤講師 (1998年4月~9月)

・兵庫県立厚生専門学院看護学科非常勤講師 (1998年10月~1999年3月)

【所属学会】

日本高等教育学会/日本心理学会/日本教育心理学会/日本発達心理学会/日本カウンセリング学会/日本認知科学会/関西心理学会/日本心理臨床学会/日本健康心理学会